

古文書に記された葛野の用水路

大月市七保町の葛野・大島・下和田の3地区は、葛野川東岸に開けた、連なる地域です。幾重にもなる河岸段丘面に耕地や住宅があります。江戸時代には、葛野と大島で葛野村を、その隣村に下和田村を形作っていました。

江戸時代前の古記録がないので、それまでの確かな歴史はわかりませんが、江戸時代の文書はいくらか残されています。地域史を明らかにできるほどではありませんが、少しでも地域の歴史を解明して、それが人々に知られるようになればよいと思います。限られた文書からわかる旧葛野村・下和田村の歴史の一つとして、当時からある用水路について記述します。なお、葛野の用水路には正式な呼称がないので、以降は便宜上「葛野用水路」とします。

江戸時代の葛野村は、記録が残るなかで、家数は天保年間(1830～1844 年)中頃に 140 戸4カ寺、人口は天明7(1787)年の 654 人が最多です。寛文9(1669)年の検地では村高 239 石余でした。そのうち、田が 96 石余、面積 10 町歩(約 10 ヘクタール)弱、畑が 123 石余(屋敷地を除く)、面積 20 町歩余(同)で畑勝ちでした。一部明治の統計に依りますが、郡内領各村と比べると、村高・家数・人口・水田面積・田畑合計面積は郡内平均よりやや多い村でした。

一方、下和田村は、家数は天保7(1836)年に 104 戸1カ寺で、人口は文政7(1824)年の 468 人が、記録がある中で最多です。村高は、寛文検地で 175 石余でした。そのうち、田が 24 石余で面積2町7反余、畑(屋敷地を除く)が 139 石余、面積 25 町5反余でした。郡内領各村のなかでは、村高・人口・家数ともに少ないほうでしたが、田高は郡内領平均の半分程度、畑高は平均以上でした。

山勝ちの郡内にあって、葛野村の水田面積が多いのは、土地の条件はもちろんですが、江

戸時代早期に既に葛野用水路が有り、村民の努力でそれを維持、管理してきたことに依ります。葛野用水路の初期の築造年代は全くわかりませんが、寛文9年には既に用水路があったと考えられます。その根拠は、葛野用水路は隣村の下和田村まで延びていますが、下和田村の田高が寛文検地以後全く変わっていないからです。用水路が開削されれば、田高の大きな増加があるはずですが、下和田村の田高は変化がありません。一方、葛野村の田高は、寛文検地以後、安政年間以前までに田高が9石余り増加して 105 石余になり、畑高が6石弱減少しています。これは用水路沿いだけでなく、幾筋もの沢水を利用した沢田も含めて、水利の向上に依る、畑の「田成(たなり)」も含めた開田があったものと考えられます。

現在の葛野用水路は、田無瀬から下和田までおよそ3kmありますが、寛文期頃は現在より短いものでした。それが延長されたのは、出水のたびに河床が侵食されて低下し、それに伴って取水口が次第に上流に上って行ったからです。

葛野川と用水路に関係する古文書の記録を「葛野村の堤防と用水路の「御普請」の記録」(別掲表)としました。それを見ると、江戸時代後半だけでもこんなに多くの堤防・用水路の工事があった、つまり洪水が多かったことがわかります。堤防の被害は上流・下流を問わずに起こりますが、用水路の被害は、取水口付近や上流域に多くなっています。事実、「葛野村の堤防と用水路の…」としたのは、用水路末の下和田村には、堤防「御普請」の記録は有りますが、用水路「御普請」の記録は全く無いからです。それは、葛野川だけではなく、全国的なことだと思われます。地域を問わず昔人の苦労が偲ばれます。

ここに展示する村絵図と古文書は、葛野用水

路の初期の様子と、二つの堀抜(便宜上「大口堀抜」、「高岩堀抜」)を築いて現在の形に近いものができるまでの工事の様子がわかるものです。

その時期と展示物は、

(1)堀抜ができる前

村絵図、「天明二年用水路御普請出来形書上帳」(1782年)

(2)「大口堀抜」計画と工事

「議定連印證文之事」(推定 1788 年)、
「寛政元年用水路御普請出来形書上帳」(1789 年)

(3)「高岩堀抜」以前の経過と工事

「文政八酉年用水堀抜御普請出来形書上帳」(1825 年)

です。

古文書の中に「御普請」という言葉が何度も出てきます。御普請は、江戸時代の各種の土木工事の中で、工事規模が大きく、村の負担だけでは完成が困難な工事に対して、幕府が費用の一部を負担するものです。それに比べて小規模な工事は、「村普請」「村繕(むらつくろい)」などといって、村だけの負担で行われました。

展示する古文書は、御普請として行われた工事の報告書です。葛野村にも下和田村にも村普請に係る古文書は残っていませんので、村普請で行われた工事は全くわかりません。

江戸時代の村絵図(年代不明)を見ると、用水路は上下2本あり、それらを「大口上堰」「大口下堰」と記した文書もあります。その取水口は現在よりはるかに下流で、村絵図からは、上堰は葛野区和田原地内から、下堰は和田原か沖地内から取水していました。現在では「大口」という地名は残っていませんが、当時は現七保橋付近から下流の川辺一帯を「大口」と呼んでいました。「上堰」は葛野和田原から隣村下和田まで、「下堰」は、沖から「どうかん沢」を過ぎ、「桐木田」まで続いていました。記録に登場する葛野の用水路は、ほとんど大口上堰です。「大

口下堰」は、天明2(1782)年の文書に名前があり、また天保14(1843)年の村絵図にも「用水下堰」とありますが、いつ現在の上堰1本になったかはわかりません。

寛政元(1789)年に一つ目の「大口堀抜」ができて今年(2025)年は236年、文政8(1825)年に二つ目の「高岩堀抜」ができて200年になります。この後も大雨出水のために取水口や用水路の流失崩壊や川底低下はありました。それでも、高岩堀抜の完成前後を比べると、古文書が残っているものだけの比較ですが、宝暦6年から完成前70年間に27回の用水路関係御普請があったのに対して、その後の明治2年まで45年間に6回で、およそ3分の1に減りました。村普請に依る小規模な工事は有ったかもしれませんが、江戸時代の村民の負担は小さくなりました。

明治から150年余、川の侵食作用による河床低下は避けられず、取水口はさらに上流に移り、今は強固な堰堤の上にあります。近代技術のお陰で、江戸時代のような頻繁な用水路工事はなくなりました。今日まで大きな心配もなく落ち着いて生産活動に勤しめたのは、用水路の原形を築いてきた江戸時代の人々の苦勞の賜物であると同時に、現在も用水路の保全に努める地元の人々の御尽力によるものです。

なお、現在の用水路は、江戸時代に掘られた大口と高岩の二つのほかに、「さすみや」にも堀抜があります。しかし、さすみやの堀抜は、いつ造られたものか記録がありません。おそらくは昭和4(1929)年の県道整備工事の時期と思われますが、これについては、今後も調査を進めたいと思います。

資料:葛野区有文書

文責:大月市郷土資料館

協力:資料館友の会「古文書研究の会」

2025.3.13

現在の葛野用水路のようす

撮影:2025.3.7

①現在の取水口



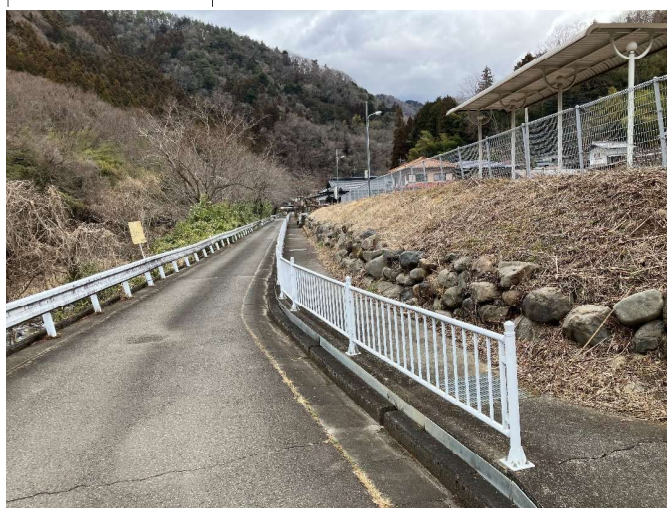
②高岩堀抜



③大口堀抜



④和田原暗渠



⑤福泉寺前開渠



⑥さすみや堀抜



